研究課題	大正大学学部生の日本語誤用分析
研究代表者	中島　紀子 （表現学部　表現文化学科　助教）

１．研究目的

本研究は、学部の違う学部生に対して日本語使用の現状を調査した上で、誤用の実態を明らかにし、その所属する学部の専門の特質と誤用の関係を分析しようとするものである。学部を超えた調査を行い比較することで、最終的には大正大学全体の現状を把握することを目標に、専門別に学生の言語活動に活かせる提言ができることを目的としている。

文化庁国語課が 1995 年より毎年行っている「国語に関する世論調査」では、さまざまな日本語の誤用事例が発表されている。世論調査の質問項目に倣い、本校表現学部で調査をした結果、敬語表現（尊敬語・謙譲語の混同・混用並びに過剰敬語）、可能表現（ら抜き言葉）、使役表現（さ入れ言葉）に関する誤用の使用が多くみられた。（拙稿「「問題な日本語」の誤用分析―大正大学学部生の実態調査」『大正大學研究紀要』第 103 輯 pp.107-130（2017））

そこで、本研究においては増加傾向にある「敬語」の誤用、可能表現の誤用である「ら抜き言葉」「れ足す言葉」、使役表現の誤用である「さ入れ言葉」、授受表現「やる／もらう」の５つの誤用に関して、大正大学の学部生の実態を調査・分析し報告する。

２．研究方法

誤用に関するさまざまな研究があるが、その多くは「第二言語習得における誤用」「日本人帰国子女の日本語誤用」または「大学生のビジネス文書にみられる誤用」に焦点が当てられている。現在行われている大規模な調査研究には、文化庁国語課による「国語に関する世論調査」があるが、文化庁の調査を流用している先行研究には、寺川（1999）のみが散見される。寺川の実証研究は、女子短期大学の１、２年生に向けに 20 年前に実施されたもので、その後は更新されていない。本研究は、過去に行われた「国語に関する世論調査」の設問に倣い、大正大学学部生の誤用使用実態を明らかにする実証研究であり、３年間の調査ののち、学部の専門性と誤用に特徴があるかを明らかにしたい。調査方法は以下のとおりである。

（1）誤用の現状把握

①「国語に関する世論調査」の分析

過去に行われた「国語に関する世論調査」の設問のうち、「敬語」「ら抜き言葉」「れ足す言葉」「さ入れ言葉」「やる／もらう」の５つに絞ってデータを収集し、調査結果の動向を分析する。

②「日本語検定」問題の誤答分析

検定問題の選択肢の中に誤用の現象がみられるのではないかという仮定のもと、拙稿（平成 19 年から平成 28 年までの「日本語検定」における出題傾向を調べた―2015a,2018b）に引き続き、その後の変化を平成 29 年と平成 30 年の出題で確認し分析する。

（2）学部生の誤用実態調査

①アンケート用紙による調査

「国語に関する世論調査」ならびに「日本語検定」の設問から、「敬語」「ら抜き言葉」「れ足す言葉」「さ入れ言葉」「やる／もらう」問題を抜粋し、誤用の実態が把握できるアンケート用紙を作成し、学部生に対し一定のアンケート取り組み時間を設け調査を行う。

②個別面談によるアンケート調査

「国語に関する世論調査」は国民の国語に関する興味・関心を喚起するために、毎年異なるテーマについて調査員による面接聴取法で行われる世論調査である。世論調査の調査実態に近いものとするため、文化庁の調査方法を踏襲し個別の面接聴取法を取り入れ、面接聴取の結果は、文化庁調べのうち、性別を問わず 16 歳から 19 歳の年齢群（以下、「全国平均」とする）と比較する。

【参考文献】

家入博徳（2013）「日本語リテラシー教育に求められる指導内容―社会と学生のニーズ分析をもとに―」『國學院大學紀要』第 51 巻 pp.1-11

伊藤博美（2009）「承接形謙譲語に関する適切性判断要因と尊敬語転用 ：「お／ご～する」と「お／ご～される」をめぐって」『日本語学論集　5』pp.162-180 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室

井上史雄（2017）「「ら抜きことば」20 年間の経年変化」『明海日本語』22　明海大学日本語学会 pp.1-12

蒲谷宏（1992）「「お・ご～する」に関する一考察」『辻村敏樹教授古稀記念　日本語史の諸問題』明治書院

菊地康人（1994）『敬語』角川書店

佐野真一郎（2009）「現代日本語のヴォイスにおける進行中の言語変化に関する数量的研究 :「ら抜き言葉」,「さ入れ言葉」,「れ足す言葉」を例として」

『Sophia Linguistica』第 57 号　上智大学国際言語情報研究所　pp.343-358

髙橋圭子・東泉裕子（2017）「「お／ご～される」とその周辺」『言語資源活用ワークショップ 2017 発表論文集　pp.123-132 田中ゆかり（2001）「被調査者の属性により偏りを持たない項目 :『国語に関する世論調査』（H7 度調査～H10 年度調査）」『日本語科学 9』pp.146-164

寺川みち子（1999）「東海学園女子短期大学版「国語に関する世論調査」―1998 年 4 月調査―」『東海学園女子短期大学紀要』第 34 号

文化庁文化部国語科（2016）『平成 27 年度国語に関する世論調査 コミュニケーションの 在り方・言葉遣い』ぎょうせい

山里優（2010）「「さ入れ言葉」の増加について」『國文學』第 94 巻　関西大学国文学会　pp.1-17

３．研究成果と公表

（1）研究成果

①得られた成果

研究一年目においては、表現学部一年生の誤用使用の実態と、各コースの違いの比較をすることができた。表現学部一年生に対し、アンケート調査（有効回答数 191）を行った結果見えてきたことは、「誤用」または「ゆれ」の現象が明らかであるにも関わらず、その言葉を操る母語話者である日本人大学生には、規範ではない日本語使用の意識がないことである。特に「ら抜き言葉」などは、言われて初めて「ら」が抜けていることに気づく学生も少なくなかった。また、学部内の４つのコースの中で正答率の差異が認められた。特に、クリエイティブライティングコースの学生と放送・映像表現コースの学生の正答率に差が出たため、今後さらに被験者それぞれの言語使用環境の比較、誤用使用にどのような影響を与えているか分析を試みる必要性が認められた。また、個別面接聴取（31 名）を行ったことで、言葉に対する意識の高さをみることができた。

アンケート用紙記入による調査を行った 5 項目のそれぞれの調査結果は以下のとおりである。

「敬語」の誤用に関しては、社会人になるまで実際に使用する機会が少ないことや、間違った敬語を使用していても周囲から注意を受けることがないという問題があり、学部生自身が苦手意識をもっている。「敬語」を身につけるためには、「敬語教育」を小学校低学年から義務教育として系統立てて取り入れ、学校における教室活動の中でも、家庭でも、敬語で会話をする時間を作ったり、教員と話すときには敬語を使わせるような取り組みが必須であると感じた。

「ら抜き言葉」に関しては、ますます誤用が増えていると言えるが、その内訳を見ると動詞によって異なった。調査項目「食べる」「来る」「考える」「見る」「出る」の可能の言い方をたずねる問いでは、文法規範ではない言い方をする人が増えている。その一方、「考える」などは「ら抜き言葉」の使用が進んでいない実態があることから、音節の長短が「ら抜き言葉」発生に大きく関与していると考えられる。

今回の調査対象者ではないが比較的履修者の多い（90 名）授業において、自らが使っていると考えられる「ら抜き言葉」を挙げてもらったところ、最終的に 26 の動詞が挙がり、それら 26 の動詞について、クラス全員に「ら抜き言葉」の肯定形と否定形それぞれを使用しているか記入式で聞いてみたところ、「着る」「来る」「見る」「食べる」などはほぼ全員の学生が「ら抜き言葉」を使用しているという回答であった。一方で、「入れる」「考える」「閉める」「伝える」「なめる」「用いる」などは、「ら」を抜いて使用しないと答えた学生が多く、表現学部のアンケート調査と結果が一致しているため動詞による違いはさらに詳しく見ていく必要がある。

「さ入れ言葉」「れ足す言葉」は「ら抜き言葉」ほど顕著ではないが、少しずつ浸透してきているという結果が出た。被験者ごとに分析してみると、人によってよく使う人と全く使わない人とがいるため、一概に増える傾向であるとも言いがたい現象であり、今後も経過観察が必要である。

「やる／あげる」の使用では、授受の対象が人であるか、動物や植物であるか、それ以外の事物であるかにより、使い分けができてきているとみてよさそうだ。対象が人である場合、「やる」よりも「あげる」を使う傾向がある。「花に水をあげる」に関して文化庁調査を参照すると、30 代（57.9%）、40 代（48.3%）、50 代（36.2%）の女性の使用率が高く、被験者は子供時代から周辺にあった言語（母親や姉妹が使う言語）が「花に水をあげる」であった可能性が高い。

また、面接聴取による実態調査では、今回の被験者であるクリエイティブライティングコースの学生は文化庁調べの全国平均に比べて言葉に対する意識が高いことがわかった。「ら抜き言葉」の使用が少ないだけでなく、「さ入れ言葉」に関しては「ゆれ」が現れた。「やる／あげる」についても、全国平均より使用する人は少ないものの、普段あまり意識して使っていないことも見えてきた。

②今後の課題

調査を実施する中で３つの課題が見えてきた。

一つ目に、調査対象とする項目の見直しである。今回は「国語に関する世論調査」を流用し文単位の問いかけをしたが、使用実態をみるためには文脈のある作文の中における誤用を取り上げた判断が求められる。二つ目に、コース間の差異を調べるためには、それぞれのコースから同じ条件で選別した学生に対する個別の聞き取り調査が必要である。三つ目に、環境の与える影響を調べるためにはさらに生活に踏み込んだ質問をしなければならないことである。これらを次年度以降に取り入れていきたい。

引き続き、「誤用」また「ゆれ」に関して実態調査を続け、母語話者である学部生に必要な日本語教育について考えていきたい。

（2）公表

【論文】

中島紀子（2019）「日本人大学生の日本語誤用調査研究―大正大学表現学部生の実態調査―」『表現学』査読無　第 6 号（大正大学表現学部編）pp.(19)-(36)